

目指すは「楽農」経営

栃木県農業大学校 農業生産学部 畜産学科 2年 長谷川 豪輝

まだまだ残暑厳しい9月の夕暮れ、北に向かって車を走らせる。農場管理当番の帰り道、窓を開けると吹き込む風が気持ちいい。学校から自宅まで約1時間半のドライブ、僕はこの時間がとても好きだ。

僕の家は、栃木県那須塩原市の酪農家だ。搾乳牛50頭を飼養し、両親が経営している。僕は幼いころから両親に付いて牛舎に入り、親が仕事をしている間、牛舎で遊んでいたものだ。そのうちに牛へのエサやりをするようになり、小学生の頃には父と一緒にトラクターに乗って牛の管理を手伝うようになった。牛はかわいいし、機械に乗るのが楽しくて、小学6年生になると将来は酪農を継ごうと思うようになった。中学生になると、僕は飼料作物の栽培・収穫も手伝った。家を継ぐことに迷いはなかった。そこで、僕は畜産の知識を学ぶため、地元の農業高校への進学を希望した。

しかし、僕の希望は叶わなかった。第1志望の農業高校の選考から漏れ、僕は第2志望の高校に入学した。今思うと、このころの僕は人生で初めての挫折を味わい、心折れていたのだろう。家の手伝いは続けていたものの、畜産の知識などどうでもよくなり、友人と遊び惚けるようになった。いわゆる“グレる”というやつだ。そして、とうとう高校2年の1月、僕は退学した。こんな好き勝手やっていた僕だったが、父は責めなかった。僕は家の酪農を手伝いながら就職先を探し、やがて、土木建築関係の会社に就職した。いやいやながら通っていた高校に比べると、ものを作る会社は意外と楽しく、僕はコンクリートの基礎の打ち方やアスファルトの扱い方などを習得した。我が家では、簡単な牛舎の修理は祖父がやっていたので、僕が会社で学んだ建築技術は牛舎の修理に大いに役だった。僕は搾乳の他に牛舎の修理も手伝ううちに、施設の作業効率や牛舎環境を考えるようになり、きちんと畜産の勉強をしたいと思う気持ちが強くなった。

同級生たちが高校を卒業した頃、僕は友人から「高等学校卒業程度認定試験」のことを教えられた。この試験に合格すれば大学を受験することができる。僕は畜産を学びたい一心から、認定試験を受けることにした。何とか認定試験に合格することができた僕はその後、大学に合格。同級生から1年遅れて栃木県農業大学校の学生になった。

農業大学校では、牛舎や牛は学生主体で管理することになっており、実習の時間が充実している。朝は5時30分から7時30分まで農場管理実習、9時から16時20分までが講義や専攻実習。農場管理実習は1年生2名、2年生2名の当番制で、専攻実習は平日の午後週3回あり全員参加となっている。乳牛と和牛（黒毛和種）を飼養しており、主にこの実習の時間に牛の飼養管理を行っている。夏休みは当番制で飼養管理にあたっている。僕は今、

乳牛の暑熱ストレス低減に関する卒業論文に取り組んでおり、得意とする工作で牛舎に散水装置を設置した。午後2時から4時にかけて牛舎の通路や搾乳待機所に細霧状に散水、パーラーでは牛の首筋に散水し、散水前後の体温と産乳成績を調査している。少しでも牛が暑さを凌げる環境を作りたいと考えている。

僕は農業大学校で初めて“スマート農業”を体験した。牛舎には発情発見装置や分娩監視システムが導入されており、目視ではわからない発情を検知して種付けしたり、分娩時に通報が来たりと、少ない労力で効率的に牛を管理できるようになっている。特に、分娩が近づくと、農家では昼も夜も緊張した日々を送っているが、大学校では分娩監視システムのおかげで分娩前でも牛舎に宿直する必要がない。システムが牛の体温を測定して、体温が下がれば分娩間近の情報を、破水して分娩が始まれば駆けつけ通報を携帯電話に送ってくれる。僕たちは、この駆けつけ通報を受けて牛舎に集合する。家が近い学生は20分で牛舎に到着できる。難産の場合は分娩まで2時間はかかるので、家の遠い僕でも十分に間に合う。こうして、僕たちは分娩には必ず立ち合い、難産の時は介助するので、分娩で母牛を死なせることはない。また、分娩監視システムには監視カメラも付いており、どこにいてもパソコンや携帯電話で分娩の進捗状況を見る能够なので便利である。僕たちは牛舎に到着すると、牛を緊張させないよう牛には近づかず、休憩室のパソコンで分娩を見守る。大学校は安産の牛が多いので、子牛が生まれたことを確認してから産後の処置を開始している。これらのシステムは、飼養管理にかかる労力を軽減できるので、我が家でも導入したいと考えている。

また、大学校1年生の秋には酪農ヘルパーのインターンシップに参加し、5日間いろいろな酪農家で酪農ヘルパーを経験させてもらった。農家ごとに施設や管理方法に特徴があって、とても勉強になった。大学校の授業でも、校外学習として優れた経営をしている農家を見学に行った。搾乳ロボット、哺乳ロボット、餌寄せロボット、牛の行動監視システムなどを導入している農家、昔の牛舎をパーラーに改造し施設にお金をかけない工夫をしている農家、ふん尿処理や自給飼料の生産・利用に力を入れている農家等、一つ一つの経営に特徴があった。僕は、大学校で牛の飼養管理や家畜衛生、飼料作物、農業簿記などの講義を受けたり、いろいろな農家を見学したりして学ぶ中で、ある程度の知識や技術を習得したが、一方では現実も見えてきて、これから酪農経営に不安も覚えている。

僕が目指す酪農は「牛に優しく、人が楽しい」酪農で、牛にはストレスの少ない環境を整え、働く人には余暇を楽しむ余裕のある経営を理想としている。今の牛舎は自作のフリーバーンだが、狭くて作業もやりにくい。自宅の隣には離職した酪農家があるので、その施設を借り受けて飼養スペースを拡大、ゆったりとした環境を牛に提供してあげたい。細霧システムなど暑熱対策もしたい。祖父は牛舎修理が得意なので、僕の建築会社での経験と力を合わせ

れば、牛舎を自作することも可能である。また、搾乳ロボット、行動監視や分娩監視システムを導入して労働時間を軽減し、趣味を楽しむ時間を作りたい。酪農ヘルパーなどを利用して休みも設けたい。夢はあるのだが、最近は不安が大きくなっている。穀物の国際情勢を受けて飼料価格は高値が続いている。ロシアのウクライナ侵攻以降は飼料や肥料をはじめとするすべての農業資材が高騰した。生乳生産コストの大幅な上昇を受けて、生産者乳価が10円引き上げられたが、採算は合わず、酪農経営は非常に厳しくなっている。とても不安である。

しかし、僕の住む那須塩原市は生乳生産量本州1位を誇る地域。地域の酪農家と協力してこの局面を乗り越え、理想の楽しい酪農経営（「楽農」）を実現したいと思う。僕は車が趣味で、ドライブが大好きだ。少し古いスポーツカーをおしゃれに乗り回し、仕事が休みの日には遠出したい。僕がグレたときも見守ってくれた尊敬する父と一緒に。